

韓国の中国人 -- 三世代の物語 (特集 チャイニーズ・オン・ザ・グローブ)

| | |
|-----|--|
| 著者 | 任 哲 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 202 |
| ページ | 4-7 |
| 発行年 | 2012-07 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00003920 |

韓国の中国人

―三世代の物語―

任哲

●初めに

韓国にいる中国人を考える時、最初に思い浮かぶのが朝鮮族である。統計によると、韓国にいる中国人は七〇万人弱で、そのうち朝鮮族は四八万人を超えている^①。世界中に広がる朝鮮族の国際移動は多くの注目を集め、多くの報道と学術研究書が出ている。このエッセイは学術研究ではなく私の周りで起きた出来事を記録したものである。

話は一枚の白黒写真（写真1）から始まる。これは一九八二年中国吉林省のある朝鮮族村で行われた結婚式の写真である。それから三〇年が過ぎた現在、写真のなかで生きている人のほとんどは生活拠点を韓国に移している。このエッセイでは三人の女性に焦点をあて、三世代の朝鮮族と韓国の関わりについて述べたい。最初の主

人公は貴烈^{グイヨル}（写真1…一列目右から二番）、次の主人公は寿花^{スファ}（写真1…新婦）、そして最後の主人公は寿花の娘―慶玲^{キョングリョン}である。

この朝鮮族村は、広い水田に囲まれた二〇〇戸足らずの中規模の村で、漢族村に隣接している。二



写真1 寿花の結婚式

つの村の境界は明確ではなく、間を流れている灌漑水路が形式上の境界線となっている。朝鮮族村のなかにも漢族が住んでいたが、彼らは朝鮮族村には属さず漢族村の村民である。村の端っこには朝鮮族小学校があつて、中国語授業以外はすべて朝鮮語で教育を行っていた。小学校のグラウンドは授業時間以外には常に村民に開放され、村人の憩いの場となっていた。農閑期になると、サッカー試合、運動会、ダンス大会など様々な行事が行われ、村中の人が集まる。小さな小学校グラウンドは村人の共同体意識を形成する場となっていた。

韓国との往来が始まると、村人は次々と出て行き、村の様子も一変する。村人がどのように韓国に行き、どのような生活を送っていたのか。小さな朝鮮族村にある一

家三世代の物語はその実態を理解する良い材料である。それでは第一世代の話から始めよう。

●遠い南の空、懐かしい故郷

貴烈は一九三〇年代に親とともに慶尚北道から満州に渡った朝鮮族の第一世代である。満州各地を転々とした末にこの朝鮮族村に定着した。終戦後、朝鮮に戻ることもなく村に定住し、家庭を築いた。複雑な国内状況のもとで、故国の話は次第に途絶え、消息が分かるようになったのは文化大革命（以下、文革）終了後のことであった。

一九七八年、貴烈の母親はかつて同じ村に住んでいた親戚宛に手紙を出した。ここで面白いエピソードがある。共産主義国家からの手紙は当時の韓国では大変珍しい物で、韓国の警察当局は不審に思い勝手に封筒を開けて内容を読んでいた。そして、手紙の受取人を警察当局に呼び「満州に誰がいるのか」と事情聴取まで行ったのである。また、中国からの国際郵便の封筒には「South Korea」を「南朝鮮」と表記したものが多く、手紙を受け取った韓国人は非常に不愉快な思いをした人も多かったという。南朝鮮とは共産主義国家

がいう「南朝鮮傀儡政権」を連想させるようで、正しくは「大韓民国」と表記しなければならぬのだ。

話をもとに戻すと、最初に出した手紙は韓国にいる親戚に無事に届き、これを機に数回にわたり手紙のやり取りをしたが、貴烈の母親が一九八〇年に他界すると文通も次第になくなった。転機が訪れたのは一九九一年であった。会ったこともない韓国の従兄弟が山東省威海に工場を建設しようと中国を訪れたのである。「威海に会いにきてほしい」といわれたものの、農村暮らしの人が遠い山東省まで行く旅費がある訳がない。数度の家族会議の末、貴烈は借金し、二人の妹と長男とともに威海へ向かい、韓国人の従兄弟と会うことになった。貴烈は姉妹のなかで唯一の韓国生まれで、親族訪問の名義で韓国に行く話がそこで出てきた。

中韓国交成立前に親族訪問の名目で韓国の地を踏むことができた人は極少数である。一九九一年、会ったこともない従弟の努力により貴烈は長男とともに韓国に行くことになった。国交成立前であったため、直行便もなく青島から船

で韓国へ向かった。九〇年代初期の東北地域は非常に貧しく、韓国への旅費はすべて親族から借りたものであった。半世紀ぶりに故郷の地を踏んだ喜びもつかの間で、少しでも稼ごうと早速仕事を探し始めた。親族訪問の名目で滞在する貴烈らには、韓国で就労する資格はなかった。しかし、中国と韓国の経済格差は大きく、韓国で一カ月稼ぐだけで中国国内にいる家族の数カ月分の支出をまかなえるほどであった。同じ船で韓国に訪れた人の多くは飲食店・市場などで仕事をみつけて働き始め、三カ月の在留期限が過ぎても帰国することなく、不法就労を続けた。貴烈が最初に着いた仕事は韓国家庭でのベビーシッターで、そこで二年あまり働いた。同行した長男は母親の体調を配慮して先に帰国させることにし、自身は韓国で働き続けた。長男が中国の実家に戻るのはいずれから五年後のことである。

貴烈の夫は、このすべてを愉快に思っていなかった。夫の故郷は黄海道豊川郡であり、現在の北朝鮮であった。また、夫は朝鮮戦争でアメリカ・南朝鮮と戦った戦争英雄でもあることから、韓国に良

い思い出はなかった。しかし、一家の経済状況を考えると、強く反対することもできなかった。韓国への複雑な思いは晩年になっても変わらず、孫が海外留学を考える際に日本と韓国で悩んでいることを知り、断固として韓国ではなく日本を進めた。

金大中政権期以後、在外同胞の就労規制が大幅に緩和され、大勢の人が韓国へ出稼ぎに出ていた。貴烈のような朝鮮植民地時代に慶尚道で生まれた人は戸籍記録があることから、韓国国籍も取得できるようにになった。現在、貴烈はソウルで生活している。昼間は近くの老人集會場で花札を楽しみ、時々老人会が組織する観光に出かける。老人会の活動で貴烈はいつも「タヒヤンサリ（他郷暮らし）」という曲を歌う。歌詞は次のように始まる。「他郷に暮らして何年か、指折り数えてみると……」。私はいつも疑問に思う。貴烈にとっての他郷暮らしは中国での六〇数年だったのか、それとも韓国での一〇数年なのか。

●子供のために働く

朝鮮族の第二世代は一般的に中国で育ち大躍進・文革を経験した

世代を指す。この世代の人々は時代に翻弄され、まともな教育を受けることもできなかった。寿花もその一人である。寿花は黒竜江省五常県にある貧しい家庭で育ち、貴烈の一族に嫁入りしたのは一九八二年のことだ。夫の家庭も決して裕福ではなかった。白黒写真は二人の結婚式当時に撮影したものであるが、現像するカネがなく一〇年後にやっと現像できた貴重なものである。主人の父親は戦前に名古屋帝国大学を出た秀才であったが、熱狂的なイデオロギー革命の時代に帝大卒の背景はむしろマイナスであった。その才能は実ることもなく、六〇年代末に他界した。結婚式の時には夫の両親は既に他界し、叔父が家族の長老（写真1・一行目中央）であった。最初の主人公である貴烈はこの叔父の妻である。

九〇年代半ば以後、朝鮮族の間では韓国に出稼ぎに出るのがブームとなって、親族訪問・労務輸出・国際結婚といった様々な方法で韓国を目指した。時には山東省から漁船に乗り公海上で韓国船舶に乗り換え密入国する人もいた。まともな教育を受けておらず、中国語が苦手な第二世代の朝鮮族にとつ

て、中国国内では将来がみえなかった。だから、いくら苦勞しても韓国の地を踏みたかったのである。しかし、寿花には韓国に出る機会がなかなか訪れなかった。夫の家族のルーツは北朝鮮であり、親族訪問の可能性もなかった。転機が訪れたのは九〇年代後半で、寿花の母親が韓国にいる姉妹と連絡がとれてからである。

親族訪問の名義で韓国について寿花夫婦は飲食店・市場・工場・建築現場など仕事を選ばず一所懸命に働いた。寿花夫妻が韓国にきた時期はアジア金融危機によって韓国ウォンが暴落した。それでも中国東北の田舎で農業に従事するよりは何倍もよい収入が得られるのである。はじめに働けば、抱えた借金を返済し、子供の大学の学費まで貯金できたのである。周りには出稼ぎを終えて東北の田舎に戻ったが中国の生活になじめず、また韓国に出稼ぎに出てくる人もいた。この意味で寿花のような第二世代の朝鮮族にとって韓国は人生を変えることができた天国かもしれない。

しかし、豊かになつたからといってすべてがうまくいくわけではない。韓国で稼いだカネを中国

国内にいる子供に仕送りする度に子供に会いたくて涙が出ると寿花はいう。周りには、我慢できず一〜二年働いて帰国する人もいるが、多くは五〜六年間、長い人は一〇年間も滞在する。出稼ぎに出た人の子供は親戚の家に預けるか学生寮で生活する。寿花の子供は幸いなことにまじめに勉強して大学に行き、安定した職をみつめてくれた。しかし、親からの仕送りを無駄遣いし、学業を途中で諦める子供も大勢いた。夫婦どちらかが出稼ぎに出ている家庭では、夫婦感情に変化が起きて、離婚する人が増えた。もつと情けないこともある。第一世代が韓国で稼いだ財産相続を巡って兄弟ゲンカになり、家族が崩壊した話も私は何度も耳にした。

また、第二世代からアイデンティティの葛藤が顕著に現れたのである。中国生まれで、朝鮮の伝統を守ってきたプライドから、韓国の「我々意識」にはどうしても違和感を抱えるようになった。韓国は親の故郷ではあるが、自分の故郷ではないのだ。中国と韓国のサッカー試合がある度に、どちらを応援するのかと韓国人から質問されると寿花は、あたり前のよう

に中国を応援すると答えたが、多くの韓国人はこの答えに失望したという。

●いずれは中国に帰る

第三世代になつても韓国へ出稼ぎに出るものが後を絶たなかった。なかでも高校に行かず中国の沿海地域に出稼ぎに行った人が多い。九〇年代半ばに多くの韓国企業が中国へ進出した。これらの企業は中国語と韓国語が話せる朝鮮族の若者を重宝していた。朝鮮族の若者で中卒であれば、山東省の韓国企業ですぐに仕事をみつけることができた時期があった。しかし、このような好景気は長続きしなかった。大学卒業者がジョブマーケットに押し寄せると、いくら韓国語が話せても低学歴では競争に勝ち抜くことができないのである。

もちろん、すべてが低学歴のブルーカラーではない。近年、朝鮮族の第三世代が韓国で存在感を増しており、その背景にあるのが高学歴である。中国国内の大学を卒業してから韓国の大学院に進学して就職する人が増えただけでなく、中国国内の韓国企業で就職し、韓国に派遣される人も多い。また、

日本で博士号を取得してから韓国の大学で就職するケースもみられるようになった。この高学歴の朝鮮族エリート達が自分たちの韓国体験記をまとめた書籍「朝鮮族三世達のソウル物語」が出版され、注目を集めている。第一世代、第二世代は自分たちの韓国体験を言葉で語ることに留まったが、新世代は自分たちの体験を文字にして後世に残そうとしている。

慶鈴は中国国内の重点大学を卒業してから、進路のことで悩んだ時期があった。両親は子供と一緒に生活したくて韓国で就職することを勧めたが、彼女はそれをずつと拒んだ。両親が韓国で苦勞していることは良く知っていたので、毎日その光景をみたくはなかったようである。彼女と同世代の従兄弟も何人か韓国で働いているが、そこから聞こえるのはけつして良い話ばかりではなかった。現在、慶鈴は北京にある一流韓国企業で働いている。そこでも日々韓国人と関わっているが、韓国で働くよりは気楽だと本人は考えている。二〇一一年、慶鈴はソウルで結婚披露宴を行った。中国国内にいる身近な親戚は弟しかなく、他の親戚はほとんどが韓国に住んでい

るからである。写真2は結婚式の時の様子である。新婦（慶鈴）の右側に立っているのが最初の主人公―貴烈で、左側が二番目の主人公―寿花である。このなかには写真1に写っていた人が他にも一人いる。このように、親の世代が韓国で働いていることから、中国に住む第三世代が韓国で結婚式を挙げるケースは増え続けている。海外挙式のしやれたイメージと異なる生活実像がここにある。

私は韓国で働く第三世代の何人かと話すことができた。一流企業のエリート社員、飲食店のアルバイト、商売に失敗して出稼ぎに来た中卒者など様々な経緯で韓国に来た若者達だ。なかには国籍を変えた人もいる。韓国体験を聞かれると、排他性、差別、将来への不安など暗い話が多かった。「将来は？」と聞くと、「いずれは中国に帰るさ」と皆から同じ答えをもらった。

●終わりに

ソウルの地下鉄二号線と七号線が交差する「建大入口」駅近辺の一角には中華料理、東北料理、延边料理といった飲食店の看板が並ぶ場所がある。ここは朝鮮族が集

まる場所として有名である。貴烈が六〇年あまり生活した朝鮮族村の多くの人はここを足場にして韓国各地に広がっている。韓国と中国沿海地域に出稼ぎに出る人は後を絶たないが、村に戻ってくる人はほとんどいない。人口減少により村の民族小学校は一〇年前に既に閉鎖された。村人の共同体意識を形成する場となっていた小学校のグラウンドもかつての面影はない。住民がいらない空き家には、隣村の漢族が借りて住むようになった。近い将来、この村が朝鮮族の村と呼ばれなくなる日が来るだろう。



写真2 慶鈴の結婚式

う。ソウルで第三世代の結婚式がある度に、大勢の村人が集まる。田舎ではうんざりするほど多かった挙式も、ここに来てからはお互いに近況を知り、安否を確認する貴重な場となっている。朝鮮族村の共同体意識もこのような挙式を媒介に辛うじて継承されているのだろうか。二枚の結婚式写真は三代に渡る朝鮮族の生活像を理解するには貴重な資料でもある。

（にん てつ／アジア経済研究所
東 アジア研究グループ）

《注》

(1) http://www.krcnr.cn/jj/fw/201109/20110911_143894.html 二〇一二年五月二〇日確認。